学生の確保の見通し等を記載した書類

（１）学生の確保の見通し及び申請者としての取組状況

１．学生の確保の見通し

音楽芸術表現学科は、入学定員を現行の 175 名から 185 名に 10 名増員し、編入学定員を現行の 35 名から 15 名に 20 名減員する。この変更に伴い、音楽芸術表現学科全体の収容定員は、学年進行中は減員するものの、完成年度以降は現行の 770 名から変更しない。

ア 定員充足の見込み

①過去の入学志願状況データより入学定員が充足する見込み

昭和音楽大学音楽学部音楽芸術表現学科における過去 5 年間（平成 27 年度から令和元年度）の入学定員、志願者数、入学者数等は以下のとおりである [1]。

＜表 1：音楽芸術表現学科　平成 27 年度～令和元年度の志願者数、入学者数等データ＞

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	5 か年平均
A.入学定員	175	175	175	175	175	175
B.志願者数	266	289	240	261	305	272.2
C.受験者数	264	289	240	259	302	270.8
D.合格者数	242	242	211	239	269	240.6
E.入学者数	187	180	173	185	214	187.8
F.入学定員充足率(E/A)	106.9%	102.9%	98.9%	105.7%	122.3%	107.3%
G.歩留率(E/D)	77.3%	74.4%	82.0%	77.4%	79.6%	78.1%

過去 5 年間の入学者数を平均すると 187.8 名となり、変更後の入学定員 185 名に対して入学定員充足率は 100%を超え、学生が確保できている状況である。

上記の入学者のうち、音楽芸術表現学科における過去 5 年間（平成 27 年度から令和元年度）の留学生の入学者数は以下のとおりである [2]。

＜表 2：音楽芸術表現学科　平成 27 年度～令和元年度の留学生数＞

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	5 か年平均
留学生	1	2	4	5	16	5.6

平成 27 年度は 1 名であった留学生が緩やかに増加し、令和元年度は 16 名もの留学生が

[1] 平成 27～28 年度は、音楽芸術表現学科の改組前の作曲学科･器楽学科･声楽学科の合計値を掲載している。
[2] 平成 27～28 年度は、音楽芸術表現学科の改組前の作曲学科･器楽学科･声楽学科の合計値を掲載している。

入学をしている。直近の過去 3 年間の平均は 8.3 名と急増している。留学生向けの入学者選抜制度の実施（本学独自の外国人留学生入試の実施）、留学生向けの教育課程の編成（新規科目の開設）、留学生の受け入れ体制の整備（留学生委員会の設置、留学生向けの「日本語」担当専任教員の配置、日本語以外の言語で会話ができる教職員の採用）等、教育研究環境の国際化に向けて積極的に取り組みを進めた結果、その取り組みが留学生に支持されたものと判断している。

留学生の受け入れについては、今後も維持、強化していくことから、留学生として毎年度 8 名以上の受け入れを見込んでいる。

社会人については、音楽芸術表現学科における過去 5 年間（平成 27 年度から令和元年度）の入学者数は以下のとおりである [3]。

＜表 3：音楽芸術表現学科　平成 27 年度～令和元年度の 25 歳以上の社会人学生数＞

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	5 か年平均
社会人(25 歳以上)	2	4	3	2	2	2.6

社会人学生の入学者数は多くないが、毎年度継続して受け入れている。リカレント教育の高度化の観点から、本学の専門分野である音楽の分野は社会人からのニーズが一定数ある。本学では附属の音楽教室を開設しているが、在籍生徒 3,510 名のうち 25 歳以上の生徒は 1,786 名（令和元年 5 月末時点）おり、附属の音楽教室から同学科に入学している実例もある。上記の実績から 25 歳以上の社会人として毎年度 2 名以上の受け入れを見込んでいる。

②18 歳人口からみた入学定員が充足する見込み

18 歳人口 [4]は平成 4 年度の約 205 万人をピークとして減少し、平成 23 年度に 120 万人となった。その後横ばいの状態となるが、平成 30 年度以降下降線をたどりはじめ、令和 3 年度以降は大きく減少する見込みとなっている。

＜表 4：18 歳人口　平成 22 年度～令和 6 年度の概数＞

18 歳人口（概数）（単位：人）	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	H22~26 平均
	1,220,000	1,200,000	1,190,000	1,230,000	1,180,000	1,204,000
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	H27~R1 平均
	1,200,000	1,190,000	1,200,000	1,180,000	1,170,000	1,188,000
	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度	R2~R6 平均
	1,170,000	1,140,000	1,120,000	1,100,000	1,060,000	1,118,000

[3] 平成 27～28 年度は、音楽芸術表現学科の改組前の作曲学科･器楽学科･声楽学科の合計値を掲載している。
[4] 資料 1：18 歳人口と高等教育機関への進学率等の推移

平成 22～26 年度の平均と平成 27～令和元年度の平均を比較すると、18 歳人口は 98.7%とやや減少する状況で、平成 27～令和元年度の平均と令和 2～令和 6 年度の平均を比較すると 94.1%と減少する状況となっている。

一方、音楽芸術表現学科の過去 10 年間（平成 22 年度から令和元年度）の入学者数は以下のとおりである [5]。

＜表 5：音楽芸術表現学科　平成 22 年度～令和元年度の入学者数＞

入学者数（単位：人）	平成 22 年度	平成 23 年度	平成 24 年度	平成 25 年度	平成 26 年度	H22~26 平均
	225	226	194	223	185	210.6
	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	H27~R1 平均
	187	180	173	185	214	187.8

平成 22～26 年度の平均と平成 27～令和元年度の平均を比較すると、入学者は 22 名減り、187.8 名となっている。この数値に上述した 18 歳人口の令和 2～6 年度の増減率 94.1%を乗じると 176.7 名となる。この 176 名が令和 2 年度から令和 6 年度までの 18 歳人口を踏まえた入学者の予測数となり、入学定員の 185 名には届かない状況となる。

しかし、①で示した外国人留学生が増加している（毎年度 8 名以上の受け入れ見込み）、25 歳以上の社会人学生が継続して入学している（毎年度 2 名以上の受け入れ見込み）ことと、下記に示す③と④の充足見込みを加えることで、185 名以上の入学者を毎年度受け入れることができ、令和 6 年度までの長期的な視点で安定的に適正な学生数が確保できると判断している。

③学生募集地域と 18 歳人口からみた入学定員が充足する見込み

音楽芸術表現学科の入学者のうち、近年入学者が増えている地域は、神奈川県と東京都である [6]。神奈川県は都道府県別の割合で 26.4%の 1 位、東京都は 14.2%の 2 位となっており、本学が位置する神奈川県川崎市の立地面から、今後の学生募集活動においての重要地域と言える。

この神奈川県と東京都の 18 歳人口は今後、以下のとおり推移すると予測されている [7]。

＜表 6：18 歳人口　令和 2 年度～令和 6 年度までの予測＞

神奈川県の 18 歳人口	年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度
	人	79,403	77,792	77,830	76,018	73,995
	割合(%)	100.0	98.0	98.0	95.7	93.2
東京都の 18 歳人口	年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度
	人	105,200	102,954	103,996	102,057	99,652
	割合(%)	100.0	97.9	98.9	97.0	94.7
全国の 18 歳人口	年度	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度
	人	1,167,348	1,136,822	1,120,783	1,096,654	1,061,763
	割合(%)	100.0	97.4	96.0	93.9	91.0

[5] 平成 22～28 年度は、音楽芸術表現学科の改組前の作曲学科･器楽学科･声楽学科の合計値を掲載している。
[6] 資料 2：「都道府県別　入学者数推移（大学　音楽芸術表現学科）」
[7] 資料 3：「リクルート進学総研マーケットリポートより 18 歳人口予測　南関東版」を基に作成。令和 2 年度を 100%とした各年度の割合を示している。

本学が重要地域としている神奈川県と東京都は全国の 18 歳人口と比較しても、人口減少の割合は緩やかである。神奈川県と東京都からの入学者の受け入れを積極的に展開することにより、入学定員に対してさらに多くの学生の受け入れが見込めると判断している。

④コース別の動向からみた入学定員が充足する見込み

音楽芸術表現学科に開設している各コースの入学者の推移 [8]を見ると、鍵盤楽器や弦・管・打楽器、声楽等のクラシック系の各コースは、比較的長期間に亘って学習準備をしてから入学する傾向にあるため、あまり大きな変動がなく安定的に入学者が確保できている。一方、ジャズ・ポピュラー音楽の分野 [9]においては、短い学習期間でも入学が可能であること、また全ての音楽大学がポピュラー音楽の専攻分野を開設していないことにより、本学の入学者は増加傾向にある。クラシック系の安定的な入学者に、拡大傾向にあるジャズ・ポピュラー音楽が学べるコースを加えることによって、引き続き入学定員に対して入学者の確保が見込めると判断している。

⑤編入学定員が充足する見込み

音楽芸術表現学科の 3 年次への編入学者数の状況は以下のとおりである [10]。

＜表 7：音楽芸術表現学科　平成 27 年度～令和元年度の編入学志願者数等データ＞

	平成 27 年度	平成 28 年度	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度	5 か年平均
A.編入学定員	35	35	35	35	35	35
B.編入学志願者数	23	31	20	21	20	23.0
C.編入学受験者	23	31	20	21	19	22.8
D.編入学合格者	23	30	19	21	19	22.4
E.編入学者数	23	29	18	18	18	21.2
F.編入学定員充足率(E/A)	65.7%	82.9%	51.4%	51.4%	51.4%	60.6%

過去 5 年間の編入学定員充足率は 60.6%と著しく低く、編入学定員を上回る学生確保が全くできていない状態が続いている。さらに直近の過去 3 年間の編入学者平均は 18 名、編入学定員充足率は 51.4%と、約半数の受け入れに留まっている。

[8] 資料 4：「音楽芸術表現学科　コース別入学者数」

[9] 音楽芸術学科のコースのうち、ジャズコース、ポピュラー音楽コース、サウンドプロデュースコース、作曲コース（コース内にエレクトロニカ系を設置）がジャズ・ポピュラー音楽の分野である。

[10] 平成 27～30 年度は、音楽芸術表現学科の改組前の作曲学科･器楽学科･声楽学科の合計値を掲載している。表中の数値は、3 年次への編入学者の状況であり 2 年次編入者は除く。

編入学定員を、変更する 15 名に減員して置き換えた場合、過去 5 年間の編入学定員充足率は 141.3%、直近の過去 3 年間は 120.0%となり、編入学定員は充足する状況となる。

また②で示した 18 歳人口の平成 27～令和元年度の平均と令和 2～令和 6 年度の平均を比較した 94.1%を乗じても過去 5 年間の編入学者は 19.9 名、直近の過去 3 年間でも 16.9 名となり、15 名の編入学定員は十分確保できる。

イ 定員充足の根拠となる客観的なデータの概要

①過去の入学志願状況データより入学定員が充足する見込み

ここでは、本学の過去のデータを用いて入学定員が充足していることを説明している。

表 1 は、音楽芸術表現学科及び同学科の改組前の作曲学科･器楽学科･声楽学科（以下、「音楽芸術表現学科」という。）の過去 5 年間の志願者数、受験者数、合格者数、入学者数、入学定員充足率を示し、過去 5 年間の平均の入学者数が、変更する入学定員を超えていることを説明した。

表 2 は、音楽芸術表現学科の過去 5 年間の留学生の入学者数を示し、現状の受け入れ数から、今後の見込み数を説明した。

表 3 は、音楽芸術表現学科の過去 5 年間の 25 歳以上の社会人学生の入学者数を示し、同じく現状の入学者数から、今後の見込み数を示している。

②18 歳人口からみた入学定員が充足する見込み

ここでは、18 歳人口の状況を基に、入学定員が充足していることを説明している。

添付資料 1 は、18 歳人口と高等教育機関への進学率等の推移で、そこから平成時代の 18 歳人口の状況と令和以降の 18 歳人口予測を示している。

表 4 は、18 歳人口を 5 年ごとに 3 つの区分（A 平成 22 年度～平成 26 年度、B 平成 27 年度～令和元年度、C 令和 2 年度～令和 6 年度）に分けて、それぞれの区分の 18 歳人口の増減率を示している。

表 5 は、音楽芸術表現学科の過去 10 年間の入学者数を 2 つの区分（A 平成 22 年度～平成 26 年度、B 平成 27 年度～令和元年度）に分けて、表 4 の 18 歳人口の増減率から、C 令和 2 年度～令和 6 年度の入学者予測を示している。この 18 歳人口に基づく入学者予測に、①の過去の入学志願状況データのうち、留学生の今後の見込み数と、社会人の今後の見込み数を加え､変更する入学定員に対して入学者が長期的に確保できることを説明した。

③学生募集地域と 18 歳人口からみた入学定員が充足する見込み

ここでは、本学が学生募集の重要地域としている神奈川県、東京都の過去の入学実績と

18 歳人口の状況を基に、入学定員がさらに充足する可能性について説明している。

添付資料 2 は、音楽芸術表現学科の過去 5 年間の都道府県別の入学者数、平均値、割合を示し､神奈川県と東京都を合わせて 4 割を超える入学者が集まっていることを説明した。

表 6 は、全国の 18 歳人口と神奈川県と東京都それぞれの 18 歳人口について、令和 2 年度の予測数を 100 とし､令和 6 年度まで 18 歳人口がどのように推移するかを示している。この表から、18 歳人口の減少が全国に比べて、神奈川県、東京都ともに緩やかな状況となっており、②で示した入学者よりも多くの入学者を確保できる可能性を説明した。

④コース別の動向からみた入学定員が充足する見込み

ここでは、音楽芸術表現学科のコース別の入学者数を基に、入学定員がさらに充足する可能性について説明会している。

添付資料 4 は､音楽芸術表現学科の過去 5 年間のコース別入学者の傾向を示し､ジャズ･ポピュラー音楽の分野のコースは近年入学者が増加傾向にあることを説明した。

⑤編入学定員が充足する見込み

ここでは、本学の過去のデータを用いて編入学定員が充足する見込みがあることを説明している。

表 7 は、音楽芸術表現学科の過去 5 年間の編入学の志願者数、受験者数、合格者数、編入学定員充足率を示し、18 歳人口の減少状況を考慮しても、15 名の編入学定員を十分確保できることを説明した。

２．学生確保に向けた具体的な取組状況

① 講習会・説明会の実施

本学内で実施する夏期講習会（8 月）、秋期講習会（9 月・10 月）、冬期講習会（12 月）、春期講習会（3 月）、ならびに全国の都市で 5 月から 7 月にかけて実施する受験講習会（令和元年度は 33 都市で開催。以下「全国講習会」という。）において音楽の実技や理論を中心としたレッスンを行うことで､受験に向けた指導と音楽大学への進学意欲の向上を狙う。また年間 10 回以上のオープンキャンパスを開催し、本学の施設見学や授業見学、体験レッスン等を実施する。上述した各種講習会及びオープンキャンパスでは、進学希望者個々の要望に応じて個人レッスンを実施し、また個別受験相談に対応している。

特に、夏期講習会と全国講習会は受験年度生が多く受講し、夏期講習会では受験年度生の約 80%、全国講習会では受験年度生の約 50%が受験につながっている実績が

出ている。その他の講習会やオープンキャンパスは受験年度だけではなく、広く中学生や高校生が参加しており、夏期講習会にこれらの参加者をどうつなげるかを意識して実施している。

ほかにも、進学相談会や高校訪問等を行うことで、学生の確保に努めていく。

② ガイドブックやパンフレットの作成・配付

本学のガイドブックは、3 月下旬に作成し、学内外に向けての PR 活動に活用している。ガイドブックは、資料希望者や講習会・オープンキャンパス参加者だけではなく、全国の音楽指導者や学校、楽器店等にも送付する。また、ガイドブックのほか、音楽芸術表現学科の各コースのパンフレットをコース別に作成し、その専攻を希望する進学希望者や保護者に対して内容をわかりやすく PR する。さらに英文のパンフレットも作成し、留学生の受け入れも積極的に行う。

ガイドブックは、資料請求数の増加に対応するため、平成 29 年度 60,000 部、平成 30 年度 62,000 部、令和元年度 64,000 部と、部数を増やして広報活動に取り組んでいる。

③ インターネットにおける取り組み

a. 大学ウェブサイトの活用

本学のウェブサイトにおいて進学希望者やその保護者に対して、講習会やオープンキャンパス情報、入試情報等、学生確保に向けた情報発信を頻繁に行っている。また、PC よりもスマートフォンから本学ウェブサイトにアクセスする割合が高いことから、スマートフォンでも適切に情報が取得できるサイト構造にしている。さらに、英語のウェブサイトも開設し、音楽芸術表現学科の情報を発信している。

本学ウェブサイト全体のページビューは 178,961 件（令和元年 5 月 1 日～5 月 31 日）あるが、昨年同月の 166,833 件に比べてアクセス数が増加している。

b. その他インターネット媒体の活用

本学では Facebook や Line@のアカウントを所有しており、ウェブサイトからだけではなく、これらの媒体においても同時に情報発信することで、受験生に向けた広報活動を強化している。Facebook は 4,000 名近くがフォロワーとして登録、また Line@の登録は 2,500 名を超えており、多くの登録者に対して情報を発信している。また、インターネット上の音楽大学進学情報サイトやリスティング広告等も積極的に活用し、講習会やオープンキャンパスなどへの参加者数や本学の資料請求数の増加に努めていく。

④ 編入学者の確保に向けた取り組み

併設する短期大学部からの編入学者を確保するため、対象となる学生に対しての学内説明会を行う。学内説明会には編入学受験生の半数以上が毎年度参加している。ま

た、学外からの編入学者を確保するため、音楽分野の教育課程を有する短期大学、過去に編入学の実績のある短期大学等を積極的に訪問し、編入学に関する説明を行う。

⑤ 大学院音楽研究科の博士後期課程の学生確保に向けた取り組み

昭和音楽大学大学院音楽研究科音楽芸術専攻（博士後期課程）は、定員が 0.7 倍未満となっているが、博士後期課程の学生確保のため、以下の取り組みを行う。

a. 大学院に関する説明会を年間 3 回実施し、教育課程のほか、入学試験に関する説明や博士後期課程を担当する教員との個別受験相談の機会を設け、進学希望者に対してきめ細かく対応する。

b. ②や③で示した本学のガイドブックやウェブサイトに博士後期課程に関する情報を掲載し、情報発信を積極的に行うだけではなく、大学院の専用パンフレットを作成し、進学希望者や保護者に対して内容をわかりやすく PR する。

c. ①で示した年間を通して実施している講習会において、大学院への進学希望者に対しても、レッスンや個別受験相談の機会を設ける。

⑥ その他の広報活動

音楽専門雑誌等に情報を掲載し、講習会や説明会等の開催について積極的に広報することで、学生の確保に努める。

（２）人材需要の動向等社会の要請

１．人材の養成に関する目的その他の教育研究上の目的（概要）

本学では、人材養成目的、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシー、アセスメント・ポリシーを設定している。音楽芸術表現学科に関するこれらについては以下のとおりである。

① 人材養成目的

音楽芸術表現学科は、国際的な視野をもって幅広いジャンルの音楽作品を創造できる、または舞台等で実践的に活躍できる人材を育成するための専門教育を行う。

・作曲・音楽デザインコースにおいては、アカデミックな音楽能力を基盤として豊かな創造力を持つ芸術音楽の作曲家またはコンピューターを始めとするデジタルテクノロジーを駆使した作品を制作できる作曲家を育てる。

・サウンドプロデュースコースにおいては、様々なジャンルの音楽に精通し、音楽産業界に幅広く貢献できるクリエイター、プロデューサーを育てる。

・指揮コースにおいては、音楽作品に対する洞察力を養い、芸術性豊かな表現を創造す

る指揮者を育てる。

・ピアノミュージッククリエイターコース、ピアノ指導者コース、ピアノ演奏家Ⅰコース、ピアノ演奏家Ⅱコース、オルガンコース、電子オルガンコース、弦・管・打楽器コース、ウインドシンフォニーコース、弦・管・打楽器演奏家Ⅰコース、弦・管・打楽器演奏家Ⅱコースは、個々の学修者の目指す将来像を尊重し、ソロやアンサンブルの演奏家、優れた指導者を育てる。

・ジャズコース、ポピュラー音楽コースにおいては、表現技術を総合的に学び、多方面で活躍できる優れたミュージシャンを育てる。

・声楽コースにおいては、ベルカント唱法に根ざしたきめ細かい指導により、歌い手としての基礎能力を身につけると共にオペラ教育と海外研修を通じて西欧文化を吸収し、協調性や国際性を養い、個性と創造性豊かな音楽家を育てる。

② ディプロマ・ポリシー

本学は「礼・節・技の人間教育」を建学の精神とし、広い視野と高い識見を持つ人材を育成することを目的としています。建学の精神と教育目的を踏まえ、さらに、学士課程教育を通じて身につけるべき資質・能力である「学士力」を踏まえて、本学は、各学科の所定のカリキュラムにおいて下記の能力（専門的能力、学士力）を学修成果として獲得し、厳格な成績評価のもとに単位を修得した者に対し、卒業を認定し、各々の専門分野に応じて学士（音楽）または学士（芸術）の学位を授与します。

● 音楽芸術表現学科　【学士（音楽）】

専門的能力として、以下を獲得したことが確認できること。

・基礎力：専攻実技、ソルフェージュ、音楽理論等の基礎力。

・技術力：各々の専門分野での、職業や社会活動に結びつく技術力。

・専門知識：各々の専門分野における理論や歴史、作曲家や作品についての理解。
　およびそれらの演奏表現への活用。

・表現力：専門分野における、さまざまな表現形態による表現力。

・実践的活動能力：各専門分野において実践の場に対応し発揮することのできる、
　幅広い能力。

「学士力」として、以下を獲得したことが確認できること。

1.知識・理解として、以下を獲得したことが確認できること。

・多文化・異文化に関する知識と理解：専門分野の知識を体系的に理解する。

・人類の文化、社会と自然に関する知識と理解：専門分野の知識体系を歴史・社会・自然と関連付けて理解する。

2.汎用的能力として、以下を獲得したことが確認できること。

・コミュニケーション能力：日本語と特定の外国語を用いて、読み、書き、話すことができる能力。

・情報活用能力：情報を的確に収集・分析・取捨選択し、モラルに則って適切に管理・活用する能力。

・論理的思考力：自分の考えをわかりやすく表現し、伝える能力。

・課題解決力：多角的な考察に基づく現状分析力、課題発見能力。および目標を設定し論理的に課題を解決することができる能力。

3.態度・志向性として、以下を獲得したことが確認できること。

・自己管理力：自らを律して行動できる。

・チームワーク、リーダーシップ：他者と協調・協働して行動できる。また他者に方向性を示し、目標の実現のために動員できる。

・倫理観：自己の良心と社会の規範やルールに従って行動できる。

・社会的責任：社会の一員としての意識を持ち、義務と権利を適正に行使しつつ、社会の発展のために積極的に関与できる。

・生涯学習力：卒業後も自律・自立して学習できる。

4.創造的思考力として、以下を獲得したことが確認できること。

・創造的思考力：これまでに獲得した専門的能力と汎用的能力、態度・志向性とを結び付け、知識・技能等を総合的に活用して創造的な思考力を発揮する力。

③ カリキュラム・ポリシー

本学は、建学の精神に基づき教育目的を達成するために、ディプロマ・ポリシーを踏まえ、各コースの教育課程を編成しています。

学生は、本学のカリキュラムを 4 年間履修し卒業要件を満たすことにより、専門知識や技能に加えて、社会人として求められる汎用的能力、態度・志向性、創造的思考力も学修成果として獲得することができます。

体系的な教育課程にしたがい学生が主体性をもって学修計画を立てられるよう、コースごとに履修年次を明記した教育課程を編成しています。「専門科目」、「外国語科目」、「教養科目」の科目区分を設け、それぞれ履修すべき単位数を定めています。

その中で、入学者が自ら学修計画を立て、主体的な学びを実践できるように、初年次教育科目は全学必修としています。また、「専門科目」、「教養科目」の中から、卒業

後の進路や将来の目標を考える指針となる科目をキャリア科目として設定しています。さらに、すべての科目に対してカリキュラム・マップを作成し、科目ごとに獲得できる学修成果（専門的能力、学士力）を具体的に示しています。

学生の履修においては、1 年間の履修単位に上限を設け、各科目の授業形態や成績評価方法等についてはシラバスに明記します。また、単位の実質化を図るため、授業外学修を明確に指示しています。

● 音楽芸術表現学科

専門的能力　主に「専門科目」を通して、以下を獲得する。

・基礎力 : 初年次に、特に主専攻実技の基礎力を確実に身につける。経験や実力に応じてソルフェージュや音楽理論を基礎から学ぶ。副科実技によって、専門的能力の幅を広げる。

・技術力 : 徹底した実技指導を通して、各個人の演奏能力や表現力、創造力等を高める。成果発表等の実践を通して技術力を身につける。

・専門知識 : 音楽理論や西洋音楽史の学修を通して、作曲家や作品について理解する。各コースの特色ある必修の専門科目によって知識を深め、コースの枠を超えた多様な専門科目を選択履修することによって、知識の幅を広げる。

・表現力 : さまざまな形態等を専門的に学ぶことを通して、専門分野における表現力を高める。

・実践的活動能力 : さまざまな実践の場を実習や演習を通して体験し、専門分野における実践的な活動能力を身につける。

学士力

「教養科目」、「外国語科目」、「専門科目」の学修を通して、以下を獲得する。授業内容および主体的学修において、実技・演習形態の授業や、レポート作成、プレゼンテーション等の機会を通して、以下を獲得する。

1.知識・理解：　多文化・異文化に関する知識と理解、文化、社会と自然に関する知識と理解

2.汎用的能力：コミュニケーション能力、情報活用能力、論理的思考力、課題解決力

3.態度・志向性：自己管理力、チームワーク、リーダーシップ、倫理観、社会的責任、生涯学習力

4.創造的思考力 : 主体的な学修によって獲得した知識・技能を、さまざまな場面で自ら創造的に活用する。特に最終年次において、卒業論文、卒業制作、卒業公演等に取り組むことや、実技試験の際のプレゼンテーションを通して獲得する。

④ アドミッション・ポリシー

本学は、「礼・節・技の人間教育」を建学の精神とし、各々の専門分野における実践的な能力を備えた教養豊かな人材を育成することを目的としています。建学の精神と教育目的を理解し、基礎的な演奏技術や専門知識だけではなく、基礎的な学力と豊かな人間性を併せ持ち、将来、音楽人として社会に貢献することが期待できる資質・能力を有する人材を受け入れます。

【受験生の皆さんへ】

昭和音楽大学は、入学後、本学での学修が充実したものとなるよう、「アドミッションポリシー」（入学者受入方針）を定めています。「アドミッションポリシー」は、入学前に身に付けておいていただきたい学力や資質･能力を示すもので､これに基づいて、入学試験科目を設定しています。

入学試験科目はコースごとに定めていますが、共通して身につけておくことが望ましい知識や能力、態度は以下のとおりです。

・楽典や音楽理論の基礎知識
・ソルフェージュの基礎能力（楽譜を読む、書く、歌う力、音を聴く力）
・外国語（英語）の基礎力（読む、書く、聞く、話す力）
・音楽・芸術の各分野に応じた基礎的な技術及び能力
・音楽・芸術について思考し、判断し、自ら表現する力
・多様な人々の中で、主体性を持って意欲的に学ぶ態度

⑤ アセスメント・ポリシー

本学は、ディプロマ・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、アドミッション・ポリシーに基づき、学生の学修成果の獲得状況を測定・検証するため、その方針をアセスメント・ポリシーとして定めています。

アセスメント・ポリシーは機関レベル（大学全体)、教育課程レベル（学部・学科、大学専攻科、大学院研究科・専攻)、科目レベル（授業科目）の 3 つのレベルで、学修成果の測定・検証を行います。

（1）機関レベル（大学全体）

卒業率・修了率、進学率、就職率、休学率・退学率、進路決定状況調査や学修成果に関するアンケート調査等の結果から､学生の学修成果の獲得状況を測定･検証する。

（2）教育課程レベル（学部・学科、大学専攻科、大学院研究科・専攻）

卒業・修了要件達成状況（単位修得状況、GPA、卒業研究、卒業論文等）、資格取得状況、学生の学修実態調査等の結果から、学生の学修成果の獲得状況を測定・検証する。

（3）科目レベル（授業科目）

シラバスで示されている授業科目ごとの教育目標に対する評価、学生による授業評価アンケート等の結果から、学生の学修成果の獲得状況を測定・検証する。

２．上記「１」が社会的、地域的な人材需要の動向等を踏まえたものであることの客観的な根拠

産業界で求められている人材ニーズを把握することと、産業界から期待されている大学教育の在り方と大学が取り組むべき施策を把握する目的で、「産業界の人材ニーズ調査」を実施し、平成 26 年 1 月に報告書としてまとめた [11]。

このニーズ調査において、産業界が最も大学教育に期待する項目は、「問題解決力や課題解決力を修得させて欲しい」であった [12]。本学では獲得すべき学修成果を定めており、汎用的能力として「課題解決力」を設定している。他にも「専門分野の知識をしっかり修得させて欲しい」、「チームを組ませて特定の課題に取り組む経験を積ませて欲しい」が大学教育に期待していることとして挙げられたが、それらも獲得すべき学修成果として、「技術力」、「専門知識」、「コミュニケーション能力」、「チームワーク、リーダーシップ」を設定し、対応している。本学はこのような学修成果が獲得できることを目的に教育課程を編成しているため、本学の教育は、社会的な人材需要の動向等を踏まえたものであるといえる。

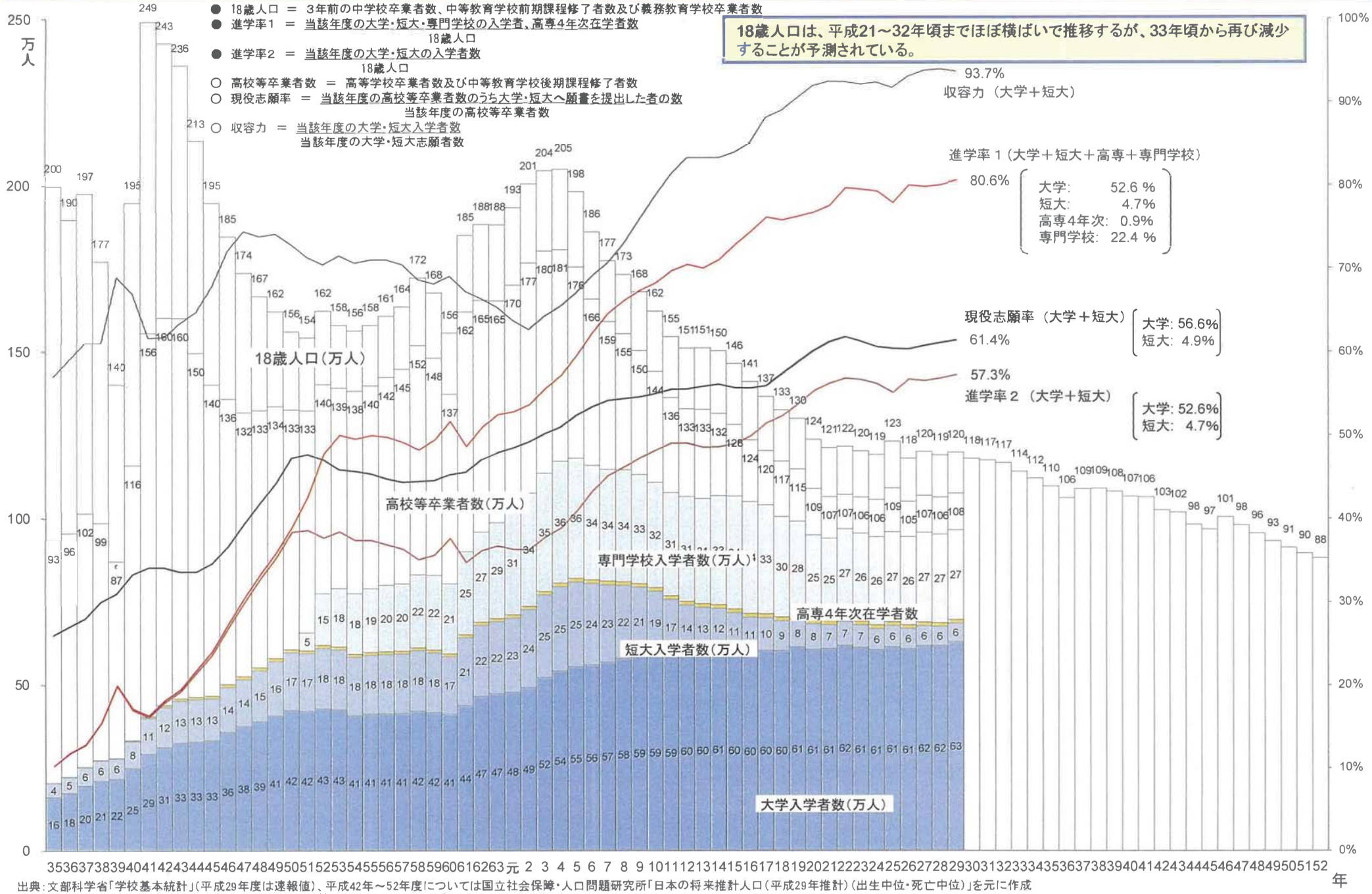
[11] 卒業生の就職先などへ調査票を 624 件郵送し、126 件から回答があった。本学は関東山梨地域大学グループとして、文部科学省平成 24 年度「産業界のニーズに対応した教育改善・充実体制整備事業」に採択され（事業年度：平成 24 年度～平成 25 年度）、その取り組みを一層推進するために本学のキャリア支援センター（現キャリアセンター）が調査を実施した。

[12] 資料 5：【3】大学教育に関して「1）大学教育に期待すること」

18歳人口と高等教育機関への進学率等の推移

- ● 18歳人口 ＝ 3年前の中学校卒業者数、中等教育学校前期課程修了者数及び義務教育学校卒業者数
- ● 進学率1 ＝ 当該年度の大学・短大・専門学校の入学者、高専4年次在学者数 / 18歳人口
- ● 進学率2 ＝ 当該年度の大学・短大の入学者数 / 18歳人口
- ○ 高校等卒業者数 ＝ 高等学校卒業者数及び中等教育学校後期課程修了者数
- ○ 現役志願率 ＝ 当該年度の高校等卒業者数のうち大学・短大へ願書を提出した者の数 / 当該年度の高校等卒業者数
- ○ 収容力 ＝ 当該年度の大学・短大入学者数 / 当該年度の大学・短大志願者数

18歳人口は、平成21～32年頃までほぼ横ばいで推移するが、33年頃から再び減少することが予測されている。



出典：文部科学省「学校基本統計」（平成29年度は速報値）、平成42年～52年度については国立社会保障・人口問題研究所「日本の将来推計人口（平成29年推計）（出生中位・死亡中位）」を元に作成

※進学率、現役志願率については、少数点以下第2位を四捨五入しているため、内訳の計と合計が一致しない場合がある。

資料１

【都道府県別　入学者数推移（大学　音楽芸術表現学科）】

地域	年度 / 県名	2015 H27	2016 H28	2017 H29	2018 H30	2019 R1	5ヵ年平均	都道府県別の割合
北海道	01北海道	8	3	4	6	6	**5.4**	**2.9%**
東北	02青森県	1	1	5	1	0	**1.6**	**0.9%**
	03岩手県	1	4	1	3	0	**1.8**	**1.0%**
	04宮城県	8	3	3	6	4	**4.8**	**2.6%**
	05秋田県	2	2	1	1	0	**1.2**	**0.6%**
	06山形県	0	3	1	2	2	**1.6**	**0.9%**
	07福島県	3	4	3	7	5	**4.4**	**2.3%**
その他関東	08茨城県	5	0	4	5	7	**4.2**	**2.2%**
	09栃木県	1	2	3	4	2	**2.4**	**1.3%**
	10群馬県	2	3	2	2	3	**2.4**	**1.3%**
	11埼玉県	9	7	8	10	12	**9.2**	**4.9%**
	12千葉県	7	5	8	3	6	**5.8**	**3.1%**
東京	13東京都	26	24	25	24	34	**26.6**	**14.2%**
神奈川	14神奈川県	48	49	36	50	65	**49.6**	**26.4%**
北陸	15新潟県	7	2	4	1	1	**3.0**	**1.6%**
	16富山県	1	1	1	0	1	**0.8**	**0.4%**
	17石川県	2	0	3	1	0	**1.2**	**0.6%**
	18福井県	1	2	0	2	1	**1.2**	**0.6%**
中部	19山梨県	3	4	1	3	3	**2.8**	**1.5%**
	20長野県	11	13	6	7	6	**8.6**	**4.6%**
	21岐阜県	1	1	2	0	1	**1.0**	**0.5%**
	22静岡県	12	16	12	10	10	**12.0**	**6.4%**
	23愛知県	4	6	3	1	5	**3.8**	**2.0%**
近畿	24三重県	1	1	0	1	0	**0.6**	**0.3%**
	25滋賀県	0	0	0	1	0	**0.2**	**0.1%**
	26京都府	1	0	0	1	2	**0.8**	**0.4%**
	27大阪府	2	0	0	2	1	**1.0**	**0.5%**
	28兵庫県	2	3	3	2	0	**2.0**	**1.1%**
	29奈良県	0	0	0	1	1	**0.4**	**0.2%**
	30和歌山県	0	0	0	1	0	**0.2**	**0.1%**
中国	31鳥取県	0	0	1	1	0	**0.4**	**0.2%**
	32島根県	1	0	0	0	0	**0.2**	**0.1%**
	33岡山県	1	0	0	1	3	**1.0**	**0.5%**
	34広島県	0	1	3	1	2	**1.4**	**0.7%**
	35山口県	0	0	0	0	2	**0.4**	**0.2%**
四国	36徳島県	0	0	1	1	2	**0.8**	**0.4%**
	37香川県	0	0	2	2	0	**0.8**	**0.4%**
	38愛媛県	0	1	2	0	3	**1.2**	**0.6%**
	39高知県	1	3	4	3	1	**2.4**	**1.3%**
九州	40福岡県	3	3	5	7	3	**4.2**	**2.2%**
	41佐賀県	0	0	2	1	1	**0.8**	**0.4%**
	42長崎県	1	1	2	1	6	**2.2**	**1.2%**
	43熊本県	1	1	3	2	2	**1.8**	**1.0%**
	44大分県	1	2	1	0	1	**1.0**	**0.5%**
	45宮崎県	3	0	0	2	1	**1.2**	**0.6%**
	46鹿児島県	2	3	4	2	4	**3.0**	**1.6%**
沖縄	47沖縄県	4	5	2	1	2	**2.8**	**1.5%**
海外	99外国	0	1	2	2	3	**1.6**	**0.9%**
総計		**187**	**180**	**173**	**185**	**214**	**187.8**	**100.0%**

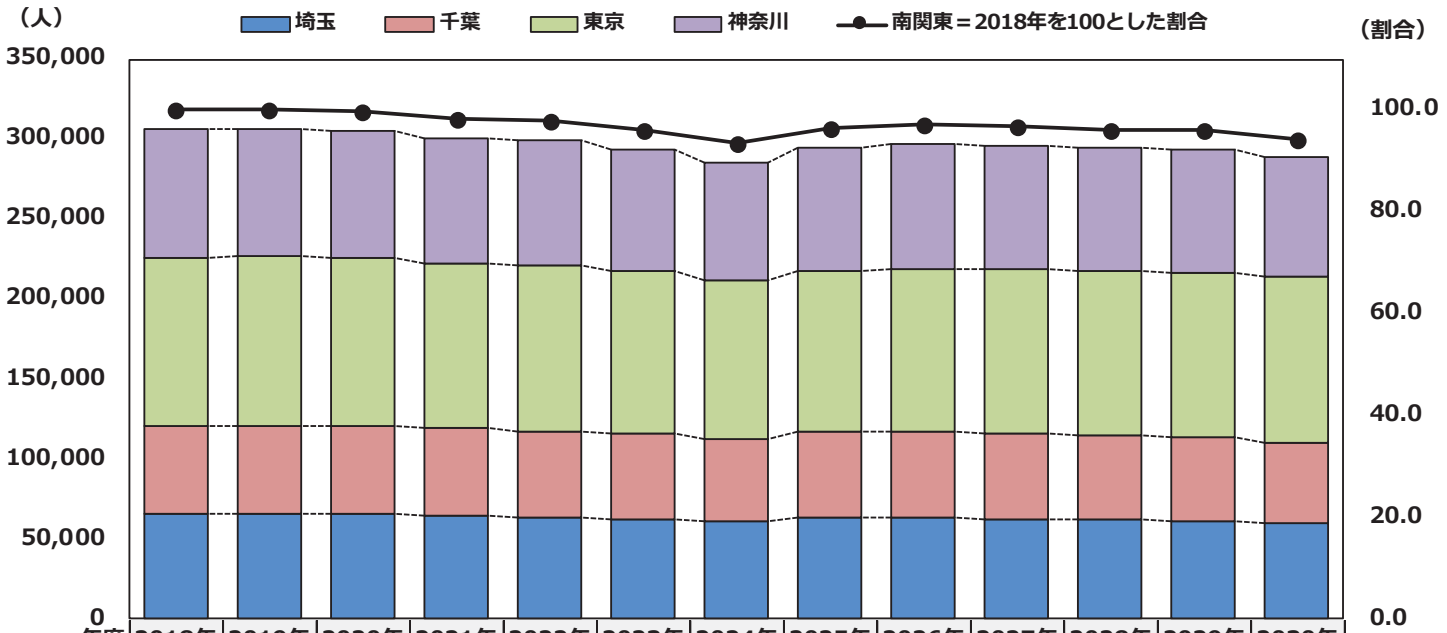
※外国人留学生のうち、志願時に国内にて住民票登録がある者は、各都道府県に計上している。

18歳人口予測(全体：南関東：2018～2030年)

資料３

■2018年305,851人→2030年288,607人(17,244人減少)

・南関東エリアは13年間で17,244人・5.6%減少し、全国の減少率11.2%を5.6ポイント下回る。
・2024年に285,805人まで減少した後、2026年まで増加し続けるが、以降は再び減少に転じる。
・減少率が高いのは、埼玉県(2018年比較8.8%)。
・減少数が多いのも、埼玉県(65,547人→59,799人、5,748人減少)。



	年度	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年	2023年	2024年	2025年	2026年	2027年	2028年	2029年	2030年
南関東	人数	305,851	306,595	305,457	300,197	299,208	293,739	285,805	295,031	297,360	295,930	294,296	293,610	288,607
	割合	100.0	100.2	99.9	98.2	97.8	96.0	93.4	96.5	97.2	96.8	96.2	96.0	94.4
埼玉	人数	65,547	65,474	65,634	64,508	63,492	62,415	60,984	63,441	63,320	62,490	62,174	61,539	59,799
	割合	100.0	99.9	100.1	98.4	96.9	95.2	93.0	96.8	96.6	95.3	94.9	93.9	91.2
千葉	人数	55,334	55,425	55,220	54,943	53,890	53,249	51,174	53,824	53,795	53,463	52,335	51,918	50,935
	割合	100.0	100.2	99.8	99.3	97.4	96.2	92.5	97.3	97.2	96.6	94.6	93.8	92.1
東京	人数	105,353	105,727	105,200	102,954	103,996	102,057	99,652	99,895	101,747	102,337	103,084	103,469	102,900
	割合	100.0	100.4	99.9	97.7	98.7	96.9	94.6	94.8	96.6	97.1	97.8	98.2	97.7
神奈川	人数	79,617	79,969	79,403	77,792	77,830	76,018	73,995	77,871	78,498	77,640	76,703	76,684	74,973
	割合	100.0	100.4	99.7	97.7	97.8	95.5	92.9	97.8	98.6	97.5	96.3	96.3	94.2

全国	人数	1,179,808	1,174,801	1,167,348	1,136,822	1,120,783	1,096,654	1,061,763	1,091,093	1,092,747	1,084,391	1,068,454	1,066,320	1,048,163
	割合	100.0	99.6	98.9	96.4	95.0	93.0	90.0	92.5	92.6	91.9	90.6	90.4	88.8

① 18歳人口概算は、文部科学省学校基本調査より、以下のとおり定義して算出した。
※全体：平成30年度（2018年）速報値、男女：平成29年度（2017年）確報値
・ 18歳人口＝3年前の中学校卒業者および中等教育学校前期課程修了者数
・ 中学校卒業者数＝高校生＋フリーター＋就職者　すべて含む
② 表内の「年度」に属する18歳とは、その年の3月に卒業を迎える高校3年生を指す。
③ 表内の「割合」とは、グラフ開始年度の値を100とおいた際の増減を示す。

音楽芸術表現学科　コース別入学者数

平成28年度までのコース			平成29年度以降のコース	入学者数 2015 H27	2016 H28	2017 H29	2018 H30	2019 R1	備考
作曲学科	指揮		指揮	0	0	1	0	**0**	
	サウンドプロデュース		サウンドプロデュース	6	5	6	10	17	ジャズ・ポピュラー音楽分野
	作曲		作曲・音楽デザイン	1	0	4	9	7	ジャズ・ポピュラー音楽分野
	デジタルミュージック			7	7				
	計		**（作曲系　小計）**	**14**	**12**	**11**	**19**	**24**	
器楽学科	ピアノ	ピアノ演奏家	ピアノ演奏家	24	10	22	12	25	
		ピアノ指導者	ピアノ指導者	10	11	10	7	10	
		ピアノ音楽	ピアノミュージッククリエイター	7	12	7	4	3	
		（ピアノ小計）	**（ピアノ小計）**	**41**	**33**	**39**	**23**	**38**	
	オルガン		オルガン	0	0	0	0	0	
	電子オルガン		電子オルガン	6	3	3	5	6	
	弦管打楽器	弦演奏家Ⅱ	弦演奏家Ⅱ	0	1	0	1	1	
		弦演奏家Ⅰ	弦演奏家Ⅰ	4	2	2	2	1	
		弦楽器	弦楽器	3	2	0	6	1	
			ウインドシンフォニー（弦）			1	0	0	
			ウインドシンフォニー			8	6	3	
		管打演奏家Ⅱ	管打演奏家Ⅱ	1	8	4	10	2	
		管打演奏家Ⅰ	管打演奏家Ⅰ	4	15	7	23	26	
		管打楽器	管打楽器	55	55	40	32	37	
		（弦管打楽器小計）	**（弦管打楽器小計）**	**67**	**83**	**62**	**80**	**71**	
	ジャズ		ジャズ	10	4	8	8	9	ジャズ・ポピュラー音楽分野
	ポピュラー音楽		ポピュラー音楽	10	12	18	20	34	ジャズ・ポピュラー音楽分野
	計			**134**	**135**				
声楽学科	声楽		声楽	29	19	32	30	32	
	ジャズ			0	0				H29以降、上記ジャズに集約
	ポピュラー音楽			10	14				H29以降、上記ポピュラー音楽に集約
	計			**39**	**33**				
（ジャスポピュラー音楽分野計）			**（ジャスポピュラー音楽分野計）**	**37**	**35**	**36**	**47**	**67**	
			計	**187**	**180**	**173**	**185**	**214**	

【３】大学教育に関して

１）大学教育に期待すること

＜ポイント＞
①チームで、問題や課題に取り組み解決できる能力の育成が、最も産業界が大学教育に期待している項目である。
②上記以外に、音楽関係企業では、専門的技術や知識の向上を大学に求めている。

全体と公的機関・芸術団体等、一般企業、音楽関連、卒業生の就職先グループの 4 つのジャンルを比較して分析した。～表 15 参照

全てのジャンルにおいて、「問題解決力や課題解決力を修得させて欲しい」と「チームを組ませて特定の課題に取り組む経験を積ませて欲しい」の 2 項目が、産業界が大学教育に期待する項目である。

「専門分野の知識をしっかり修得させて欲しい」の項目は、音楽関連で他のジャンルに比べ、大学への要望が多い。

「語学力（特に英語）を高めて欲しい」については、現在のところ期待度は低いが、グローバル化を考えると、今後期待度が上がると考えられる。

[表15]大学教育に期待すること	全体	公・芸	一般企業	音楽	就職先
専門分野の知識をしっかり修得させて欲しい。	38.7	56.4	28.4	**56.0**	41.2
問題解決力や課題解決力を修得させて欲しい。	**70.8**	**71.8**	**70.1**	**68.0**	**64.7**
チームを組ませて特定の課題に取り組む経験を積ませて欲しい。	**55.7**	**61.5**	**52.2**	52.0	**61.8**
インターンシップ等で実社会の仕事体験をさせて欲しい。	31.1	28.2	32.8	28.0	35.3
職業意識向上に役立つプログラムを実施して欲しい。	43.4	35.9	47.8	32.0	35.3
プレゼンテーション等の機会をもっと持たせて欲しい。	24.5	20.5	26.9	24.0	20.6
語学力（特に英語）を高めて欲しい。	**9.4**	**5.1**	**11.9**	**4.0**	**5.9**
グローバル社会を意識した異文化理解に繋がる体験をさせて欲しい。	15.1	10.3	17.9	16.0	11.8

※数値は、選んだ企業・団体の比率、「公・芸」は公的機関・芸術団体等、「音楽」は音楽関連、「就職先」は卒業生の就職先グループ

出典）昭和音楽大学 キャリア支援センター（平成26年1月）「産業界の人材ニーズ調査（報告書）」